

Title	ギゾー、福沢、トクヴィル (2)
Sub Title	Guizot, Fukuzawa, Tocqueville (2)
Author	後平, 隆 (Gohira, Takashi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.49/50 (2009.) ,p.51- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges dédiés à la mémoire du professeur OGATA Akio = 小瀧昭夫教授追悼論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ギゾー、福沢、トクヴィル〔2〕

後 平 隆

1.

自分の置かれた歴史的状況を語りながら、福沢諭吉とトクヴィルは似たような内容の文章を残している。1805年生まれのトクヴィルは福沢よりおよそ30歳年長である。彼は1831年4月から翌年2月にかけて同僚のボーモンと二人でアメリカを回った。そして福沢が生まれた1834年、トクヴィルは旅行の成果を盛り込んだ本の完成に余念がなかった。その本『アメリカのデモクラシー』は1835年のはじめに出版され、書肆の予想をはるかに上回る成功をおさめる。本の成功は一官吏として将来に閉塞感しかなかったトクヴィルを一躍世に送り出し、これ以降彼が文筆家、政治家として活躍する基盤をつくった。

トクヴィルは生涯にわたって友人知人に手紙を書きまくった。そのうちの一通、1837年3月に『アメリカのデモクラシー』の英訳者であるH.リーヴに宛てたもののなかに、次の一節がある。

「私がこの世に生を受けたのは、古い体制を壊したものの、その後長続きするものをなにひとつ創造できなかった長い革命が終わる頃です。私が生き始めたとき貴族政はすでに死んでいましたし、デモクラシーはまだ存在していませんでした。ですからわたしが直感的にそのどちらかのほうにやみくもに引き摺られて行くことはなかったのです。フランスは40年間あらゆることをちょっとずつ試してみたものの、そのどれをも最終的に選択することのなかった国です。ですから私が政治的夢想に関して気難しいのは当然なのです。自分自身古い貴族階級に属していますから、わたしは貴族政にたいし

て生まれつきの憎悪や嫉妬心を微塵も持っていません。そしてまた貴族政が破壊されてしまった以上、それにたいする自然な愛情もまったくありません。なぜなら人は生きているものにしか強い愛着をもてないからです。私は貴族政をよく観察できる程度には近くに、また冷静に判断できる程度には遠くにいました。デモクラシーについても同様のことが言えます。家系的にみても個人的な利害関係からいっても、わたしをデモクラシーの方に自然にまた必然的に傾斜させる要素は皆無です。しかしデモクラシーから侮辱を受けたこともありません。ですから理性的な判断以外に、デモクラシーを愛したり憎んだりする理由がわたしには少しもないのです。一言でいえば、私は過去と未来とのあいだでちょうどよい具合に平衡をとっていたのです。そのどちらか一方にごく自然に、また本能的に惹きつけられていると感じることはありませんでしたから、格別の努力を払わずとも双方に平静な眼差しを注ぐことができました。』¹⁾

この一節の傍らに『文明論の概略』の緒言を並べふたつをあわせ読むと、さまざまな考えがおぼろげな形をとって湧き上がってくる。福沢はこう言っている。

「試みに見よ、方今我国の洋学者流、その前年は悉皆漢書生ならざるはなし、悉皆神仏者ならざるはなし。封建の士族にあるざれば封建の民なり。あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し。二生相比し両身相較し、その前生前身に得たるものを以て、これを今生今身に得たる西洋の文明に照らして、その形影の互に反射するを見ば、果して何の觀を為すべきや。その議論、必ず確實ならざるを得ざるなり。』²⁾

トクヴィルも福沢も、旧秩序は破壊され、それに替わる新秩序は模索中という時代に生きているという痛切な意識に支配されながら、過渡期の意味を積極的に捉える姿勢を鮮明に打ち出している。

トクヴィルが生まれたのはナポレオンが帝政を始めた頃で、やがて皇帝が没落してルイ 18 世が王位に復したときには 10 歳でしかなかった。時代は

1) Tocqueville, *Lettres choisies · Souvenirs*, Quarto Gallimard, 2003, p. 377.

2) 福沢諭吉、『文明論の概略』、岩波文庫、1997、p. 12。

貴族政から民主政へと大転換を遂げつつある。そういう貴族政の終末に貴族として立ち会うめぐり合わせを彼は幸せであると考えている。アンシャン・レジームから革命期の共和制、そして恐怖政治、統領政府、執政政府、ナポレオンによる独裁帝国体制、さらには王政復古、そして1830年7月の革命でブルボン家が王位を失い、替わってオルレアン家が支配する体制へと、フランスの政治は変転する。自国が身もだえするそのありさまを、はじめは家族を見舞った出来事として耳に聞き、ついで自身の生活そのものとして経験しながら、彼は歴史を見る目を鍛えていっただろう。しかしそれだけならば、ほかの多くの知識人に共通していえることでしかない。彼に特徴的なのは次のことである。

七月革命のおかげで王となったルイ・フィリップは、官吏全員に今後はオルレアン家の王政に忠誠を尽くして職務をまっとうするように宣誓を求めた。そのときトクヴィルの家族や親戚は彼が宣誓することに反対するが、彼はそれを押し切る。しかし彼の宣誓は七月王政にたいする全面的な賛同と支持を意味しない。彼はむしろ批判的懐疑的であった。ではなにが彼を宣誓へと導いたのか？ それはブルボン家からオルレアン家への政権移動という歴史的大事件をさえ、貴族政から民主政へ滔々と流れるヨーロッパ文明の広大な潮流の一部分でしかないのだと考えるトクヴィルの文明史的洞察にほかならない。遅かれ速かれヨーロッパのどの国もこの不可逆的な潮流に押し流されるしかないで、フランスもその例にもれない。トクヴィルから見れば、七月王政で本格的に成立した立憲王政など共和政への橋渡的な意義しかもたないし、ましてやブルボン家による再度の王政復古を夢見て画策に明け暮れる一部の人々は早晚歴史の表舞台から姿を消す運命にある。

トクヴィルの洞察は、七月王政はルイ14世の政府に唯一欠けていた要素を補って文明の最終形態になったと考えるギゾーの『ヨーロッパ文明論』の命題と激しく衝突する。前回は『文明論の概略』と『ヨーロッパ文明論』とを対比しながら論じてみた。今回はギゾーとトクヴィルの対立へと視点を移してみたい。そこから福沢の立論に照明をあててみれば、福沢とトクヴィルを結ぶ糸の太いことがわかるだろう。

おもに取り上げるのは福沢がときどきの内政問題に反応して発言した『分権論』『通俗民権論』『通俗国権論』と、トクヴィルの『書簡選集』である。時事的発言というのはいわば筆者の基本命題がおりにふれて発現したものであり、そこに主著が備える威容を求めることはできない。けれどもそれは具体的な課題に寄り添いながら動いていく思索の姿を見せてくれる。福沢の場合でいうなら、『分権論』は『アメリカのデモクラシー』からの長い引用文を含んでいるのでことに興味深い。トクヴィルの『書簡選集』について一言すれば、これはとてもよくできた選集で、1000頁弱にびっしりと手紙を詰めこんでいる。しかしそれでも膨大な書簡から（ガリマール版トクヴィル全集18巻30冊のうちじつに17冊を占める）とくに重要なものを選びすぐっているにすぎないのだから驚く。トクヴィルにとって手紙は思索を深めるためのひとつの重要な手段であつたらしい。この『書簡選集』はさまざまな相手に宛てた手紙を、全集のように相手ごとではなく、書かれた順番に配列し、トクヴィルの思索のあとを辿ることができるよう配慮しているのがうれしい。手紙の中身は時事的な発言と言えはいえるが、なにしろ相手が友人であれ、J.S. ミルやロワイエ・コラルなどであれ、どの人も一級の知識人なので、時事に触発されながら時事を超えらることも言おうか、たいていの場合射程の長い議論のほかのものではなくなる。一つまた一つと手紙を読み進む読者の思いもまた、いつしかヨーロッパ文明の帰趨へと向かっている。

2.

リーヴ宛の手紙はその書き手が冷静な観察者であることを察知させる穏やかな調子で書かれているのにたいして、福沢から引用した一節には並々ならぬ精神の緊張が感じられる。その違いはなにに由来するのだろうか。それをつぎに考えてみたい。

まずひとつにはこういうことがあるだろう。トクヴィルが生まれたのは事件としての革命が終わる頃であつたから、革命をわが身に降りかかる災厄として体験することがなかった。つまり彼自身はアンシャン・レジームの社会

を生きていない。ワートルローで敗れた皇帝が退位して王様が亡命先から戻ったときに10歳でしかなかったトクヴィルは、ルイ18世による王政復古以降のフランス社会しか知らないといえる。いっぽう元号が明治へと変わったときに30代半ばの福沢は、彼自身が封建体制から天皇制への大転換を文字通りに生きた。この違いは大きい。「あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」という福沢の感慨に似たものをトクヴィルから探しだすのはむずかしい。トクヴィルは認識者、福沢は闘う人、これが二人の著作から受ける最初の印象ではないだろうか。

さらに違いの由来を探るならば、二人が直面し、その解決を迫られている課題が同じではないことが挙げられる。トクヴィルのほうはヨーロッパ文明の向背というまことに広大な、したがって解決策があるのかないのかわからない、いずれにしろ焦眉の急にはなりようのない課題を見据えている。それにたいして福沢の目の前には国家の危急存亡というすぐにも解決を求めている困難な課題が立ちはだかっている。

「あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」という一節を含む引用文をよく読んでみると、福沢が力をこめて訴えている相手は日本の人民一般ではなく、洋学者集団であることがわかる。なぜ洋学者に訴えるのか。なぜなら当時の日本で「その研究する所、固より粗滷狹隘なりといえども、西洋文明の一斑は彷彿として窺い得たるが如し」というくらいに洋学を研究しているのは彼らだけだからであり、その洋学の知識を活かして速く国を刷新しないと、国の独立が危ういと福沢は考えているからである。そして洋学者はつい先ごろまで「封建の士族にあらざれば封建の民」であったから、「既往を論ずるに憶測推量の曖昧に陥ること少なくして、直に自己の経験をも以てこれを西洋の文明に照らす」ことのできる日本で唯一の存在なのだ。つまり「あたかも一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」という経験は同時代のだれしもが共有している「僥倖」ではない。したがって福沢はここで洋学者に向かって、自己の使命に目覚めよ、と発奮を促していると言ってもいいだろう。

このように、歴史の大変革期を生きている認識を語るトーンの違いは、二

人の性向や資質の違いから説明するよりも、やはりヨーロッパ文明に属する者とその文明に国の安泰を脅かされている極東の小国に属する者とが、それぞれ担おうとしている課題の違いをより多く反映していると考えerのほうがよい。

3. トクヴィルの宣誓の意味

先に紹介したように、トクヴィルは家族の反対を押し切って宣誓をおこない、官吏として残る道を選んだ。ちなみに彼の父親は復古王政のもとで知事を歴任、その後1827年には貴族院議員に任じられたが、シャルル10世が亡命し、ルイ・フィリップが王になった時点でその職を辞している。息子のアレクシスがあえて宣誓した動機はなんだったのだろうか。7年後に彼の妻となるべきイギリス人女性に宛てた手紙をみると、宣誓は激しい内面の葛藤と熟慮の末の決断だったことがわかる。

「とうとう宣誓をしてしまったところだ。良心に恥じるころはなんにもない、にもかかわらずやはりほくは深く傷ついた。今日という日を生涯でもっとも不幸な日のひとつに数えることになるだろう。ああマリー、生まれてこのかた初めてのことだ、ほくから見れば間違った行動をしているけれど、ほくは尊敬している人たちを避けなければならないとは。胸が張り裂けそうだ。」³⁾

いったいトクヴィルは良心にかけてどういう自問自答を繰り返したのだろうか。ほぼ同時期に4歳年少の友人が宛てた手紙がそれをうかがわせてくれる。

「ほくは戦にとどまった、新政府に宣誓したのだ。そうすることでフランス人として絶対に為さなければならない義務を果たしたと信じている。現況では、もしルイ・フィリップが転覆されでもしたら、それでアンリ5世が有利になることはありえないし、共和国が無政府状態のどちらかになるだろう。だから国を愛するならば、とやかく言わないで樹立された新しい権力の

3) 前掲『書簡選集』p. 154。1830年8月17日の手紙。

側につくべきなのだ。今フランスを自滅から救えるのはこの権力だけだというのはあきらかなのだから。ほくは新王を軽蔑しているし、彼の王位継承権はきわめて怪しいと思う。が、しかし、ほくは彼をしっかりと支えようと思う、彼が王位に就くよう尽力はしたけれど、遠からず彼を手懐けるか、あるいは敵に回るかする連中よりしっかりとね。」⁴⁾

この文面からも窺えるように、シャルル 10 世が追われたとき次をどうするかというのは、国の命運にかかわる大問題だった。正統王朝の系譜を論拠にしてアンリ 5 世を担ぐ一群がいた。シャトーブリアンもその一人である⁵⁾。しかしトクヴィルははっきりとアンリ 5 世の芽は摘まれていると認識している。なぜなら人民がブルボン反動政府の順送りを容認する雰囲気はまったくなかったからである。この認識ではギゾーと一致するし、それは、頑固な貴族を除けば、おおくの知識人が共有するところだった。そしてアンリ 5 世を除外したら、残る選択肢は三つ。無政府状態、共和制への移行、それからブルボンからオルレアンに替えての立憲王政。この難局に指導的立場にあった知識人たちは、アナーキストの跳梁に委ねたら国は滅びる、共和制は時期尚早、との認識でもほぼ一致していた。だから民衆に絶大な人気があり、共和制大統領候補の筆頭だったラファイエットは、市庁舎正面のベランダに立ち、三色旗で自らとルイ・フィリップを包み込んで、押し寄せた民衆の面前で融和のジェスチャーをしたのである。

トクヴィルが熟慮の果てに宣誓して、力のかぎりルイ・フィリップの政権を支持しようと決意した意味はここにある。それは（もし福沢の用語を借りるなら）彼の「推考の愛国心」のなせることであつたと言えるだろう。

4. トクヴィルの歴史観—ギゾーとの違い

「大きな共和国がどういうものか見に行きたい。唯一の気がかりは、あちらに行っているあいだにも、フランスが共和政になることだ」とトクヴィルはおなじ手紙のなかで北米旅行の願望を洩らしているが、『書簡選集』の編

4) 同書、pp. 156～157。

5) 拙稿「ギゾーとシャトーブリアン(1)(2)」(日吉紀要 n°24, n°25) で触れている。

者によれば、現存するトクヴィルの書き物をみても、彼が七月革命以前にこのような願望を表明した形跡はないらしい。そして実際二ヶ月後に彼は刑務所制度を自費で視察してきたいと政府に申し出て、申請は受理される。北米訪問の秘められた目的について贅言を弄する必要はないだろう。ただフランスの知識人のあいだで、古代ギリシャの都市国家ならぬ大きな近代国家を共和制で運営できるかという課題をめぐって議論が交わされ、おおくはこれを疑問視していたことは知っておかなければならない。そして疑問視こそすれ、それを確かめるといふ明確な目的をもってはるばる海を渡ったフランスの知識人はいないということも。ギゾーがその典型であるが、フランスの知識人にとって、政治システム上のモデルはあくまでもイギリスであった。イギリス流の立憲王政のシステムをフランスに移植し、定着させること、それがギゾーの念願であり、そうすることによってしか1789年以來の騒擾を鎮めることはできない。

ところがトクヴィルはそう考えない。

繰り返しになるが、ギゾーはフランス史上最初の本格的な立憲王政となった七月王政を目して、ヨーロッパ文明が漸くめざす到達点に達したのだという揺ぎ無い確信を抱いている。その確信を基盤に、ギゾーは七月王政を牽引する大臣としてさまざまな政策を実行していくのだが、それに対する代議士トクヴィル（1839年の国会議員選挙で初当選して以来）の疑念は濃くなっていくばかりであり、それはついに1848年1月27日の下院でのかの有名な演説（「あなたがたは感じないのか、大気のなかに高まりつつある革命の風を？」）で頂点に達する。しかしそこに行き着くまでも、トクヴィルの筆からはアンチギゾーの文章が次々と繰り出される。

たしかにトクヴィルは1829年から翌年にかけてギゾーの連続講義に出席してヨーロッパ文明の見方を教わったのだろうが、この時期の書簡に目を通してみても、ギゾーの進歩史観とは異なる考え方が散見される。たとえば人間について：「ぼくの意見では、人間は文明化されるにつれて良くなると断言できるものではない。むしろこう言うべきだろう、人間は文明化されるにつれて以前には持っていなかった美德と悪徳とをとともに獲得する、と。つ

まり人間は違ったものになる、というのが一番はっきりしていることだ。』⁶⁾
 また社会について：「公に言われるほど、進展した文明の状態が中間の状態より優っているかどうか疑問に思う。』⁷⁾

もしこれをちょっとした見解の相違ではないか、大仰に述べ立てるまでもない、と考える人がいるなら、それは違うと言わなければならない。なぜならトクヴィルが繰り出す批判の矛は、たとえその先が政治制度や個別の政策に向けられる場合でも、ではその制度のなか、その政治のなかで人間の精神はいかように高まるか、あるいは墮落するかという深刻な問いかけを帯びているからだ。別のところで検討したから詳述は避けるけれども⁸⁾、ギゾーの民主主義勢力にたいする構えはつねに抑圧的である。社会下流から押し寄せる、われわれも政治に参加させよという多くの場合に騒乱となって現れる要求にたいしては、ノンを突きつける。ジャーナリズム規制法や集会制限法、そして高所得者や知識人など当時の用語では *la capacité* と呼ばれた人々のみ選挙権と被選挙権を限る制限選挙法など、ルイ・フィリップ政府が打ち出す政策には一貫した方向性がある。とにかく現在の権力機構を脅かしかねない動きに神経を尖らせるあまり、社会秩序が安寧の様子ならばそれでよし、すべては順調に推移していると判断するのである。実際はじめの数年間七月王政はさまざまな方面からの攻撃にさらされたが、やがてパリの民衆が通りにおいて派手に騒ぐことも少なくなると、その静けさは為政者の目には王政の安定化と映った。ほっと胸をなでおろす為政者の視線がおとなしくなった民衆の精神のありさまにまで届いているはずはなかった。

ところがトクヴィルが問題にするのはまさに人民の精神のあり方なのだ。といっても彼は文学者ではないから、人々の精神の襞のひとつひとつに触手を伸ばし、そこで起きていることを鋭く感知してはこれを表現することに興味をもっているのではない。彼の関心はほとんど次ぎの一点に注がれているようにみえる、すなわち人民の精神のあり方と社会や政治の制度とは互いに

6) 同書、p. 147。

7) 同書、p. 145。

8) 拙稿「ギゾーの文明論(3)」(日吉紀要 n°44)

どのような影響を及ぼしているのかに。それは貴族政を覆したあとのフランスが、嵐の海原を抜けた船が無事に港に入るように、かしこい民主主義制度のなかに入っていけるかどうかを左右する大きな問題であった。

5. 立憲君主政は最終形態ではない

七月王政で主導的な役割を果たした政治家で、トクヴィルから大きな疑問符をつけられたのはギゾーにとどまらない。ギゾーと対立するティエールも、また民主主義勢力の旗頭であるラマルチヌも、それぞれちがった理由からトクヴィルの批評の対象になっている。ここでギゾーを取り上げてみるのは、1840年前後から政権を実質的に取り仕切ったのがギゾーだからである。トクヴィルは1839年に代議士に選出されて以降、ギゾーが2月革命で政権の座を追われるまで、おなじ土俵のうえでギゾーの政治手法をつぶさに見て、これと闘った。そして1830年から1848年までの18年間は、ブルジョワジーに依拠する政権が、社会の下層から押し寄せるうねりを民主主義勢力と呼んで敵視した長い期間であったから、それはトクヴィルにとってまたとない実践の場となった。

つまり1835年刊行の『アメリカのデモクラシー第一巻』で企図されたのが、民主主義が大西洋のあちら側で実際どのように運営されているかを詳しく紹介することだったとすれば、1840年4月刊行の『アメリカのデモクラシー第二巻』におけるトクヴィルの野心は、アメリカでの見聞を咀嚼しつつ民主主義社会の実態をさまざまな局面から熟思した成果を差し出すことによって、民主主義を恐れ、抑圧という手段に訴える指導層の意識改革をすることだったと思われる。政治家としてのトクヴィルの活動は、その延長上にあるいわば実践篇である。

とにかくギゾーを批判する発言や文章は枚挙に遑がない。それらを時間軸に沿って並べてみれば、それだけで七月王政の陰のクロニクルができそうなくらいであるが、その大量の批判的言辞の根っこにある考え方は一貫している。その代表的なものを一瞥するだけでもふたりの基本姿勢の違いを鮮

明にできるだろう。論点を絞ってみる。

① 中流階級は政治的基盤となりうるか

1830年革命以前の対立構図は、「貴族階級 vs 中流階級 + 下層階級」。それが革命を境に貴族階級が政治的勢力を失った結果、新しい対立構図：「中流階級 vs 下層階級」が生まれる。そして新しい権力者が中流階級に立脚していることをよく示すのが、一定額以上の納税者にのみ選挙権・被選挙権を与える制限選挙制度である。

前述の友人ストッフ宛ての手紙をみると、はやくもトクヴィルは中流階級の能力に不信を感じているようだ。「現在の状況は流動的だよ、シャルル、中流階級は革命をしたものの、じきに後悔しなければいいけれど。もう下層階級からはあたらしい貴族階級扱いされているしね。新聞は煽り立てている。今回一大勢力になってからというもの、民衆は追従者を欲しがっているのさ。中流階級はこの追従者たちに抵抗できるようしっかりと纏まることができるだろうか。いま自分たちが危うい立場にいると感じて、それに対処するには団結が必要だとわかるくらいの才覚はあるのだろうか？ そうであって欲しいけれど、どうかな。あまりあてにできそうもない。いずれにしろ、この問題の解決いかにわれわれの未来はかかっている。」⁹⁾

この一節でトクヴィルは階級間対立の当事者が変わったと強調しているのではない。それは言わずもがなのこと。彼はブルジョワジーの団結能力に疑問符をつけているのだ。そのことを裏付けるのが、それから10年後仏英間に危機が生じた時点で書かれたJ. S. ミルへの手紙の一節である。

「国民は侮辱されたと感じたのです。そしてじっさい侮辱されたのです、わが大臣たちの行動によってではないにしろ、かれらの言葉に。政府は国民に告げていたように、国民の名において脅しをかけ、さてこの不用意で馬鹿げた脅しが危機を招くと、途端にこの同じ政府、この同じ君主は、あれほど怒りっぽくて、誇り高い態度をみせていたのに、今度は退却が必要だと宣言

9) 同書、p. 157。

したのです。この合図に、中流階級の大半は彼らに特有の弱さとエゴイズムの手本を示しました。退却だ、なにがなんでも戦争を避けよと大声で要求したのです。だれもが右往左往と逃げ惑ったのです、なにしろトップが範を垂れたのですから。」¹⁰⁾

以上二つの引用文からは、貴族としての矜持がブルジョワの手前勝手に軽蔑を抑えきれない様子が如実に感じられる。中流階級は自分一個の安寧と蓄財しか頭になく、したがってそれが危ういと見るや、手のひらを返すように、意見を変える。そこには連帯して難局に立ち向かう意思も能力も感じられない、と。

けれども民主主義が健全な根を張っていくべき土壌は、実際にはこの中流階級以外のものではない。ギゾーなどは中流階級を下から突き上げる勢力を民主主義勢力だと思い込んでいるけれども、それはじつは革命勢力だというのが、トクヴィルの変わらぬ見立てだからである。果たしてこの土壌のうえにフランスの民主主義は育つのか、との懸念が彼の頭から消えることはなかったように思える。

② 安寧と物質的幸福の落とし穴

トクヴィルの懸念をはっきりと示す文が『アメリカのデモクラシー第二巻』にある。そこではフランスの中流階級が云々、とは明言されていない。しかし民主主義社会に暮らす人民が、平等が可能にした物質的幸福の追求に意気込むあまり、彼らのうちで政治的自由を守るための反骨精神が弱まったときの落とし穴を語りながら、トクヴィルが暗に指しているのは自国の現状である。

「このような民主的人民において、物質的幸福を求める気持ちが知識や自由の習慣が獲得されるよりも早いスピードで広まると、人々は折りあらば掴み取ろうと構えているこうした新しい財を目にするや、興奮し、まるでわれを忘れたようになる時がやってくる。頭は金持ちになることで一杯になり、

10) 同書、p. 473。

自分の幸運をみんなの繁栄に結び付けている緊密な繋がりはまだで念頭になく、こうなってしまった市民からは、現に手にしている権利をもぎ取らなくてもよい。彼らはなんの痛痒を感じることもなく、権利が掌中からこぼれ落ちて行くにまかせるだろうから。政治的義務を果たすことは、彼らにしてみれば、財産造りの邪魔になるだけの厄介事である。」¹¹⁾

平等は一国の人民のほとんどが数百年にわたる貴族政のあいだ夢にも見なかった、あるいは夢見ても仕方なかった物質的幸福追求の下地を作った。そうである以上、人々が金儲けに夢中になり、生活を豊かにしようと駆け回るのは当然であって、トクヴィルはその光景を苦々しく思っているわけではない。が、しかし彼はそこに隠されている落とし穴が大きくて、深いと知っているのだ。トクヴィルが見ている危険とはなにか。

「働く市民たちが公共のことを顧みなくなり、しかもまた余暇を公共のために振り向けうる階級がもはや存在しないのだから、政府は空っぽであるも同然である。

もし、そのような危機的な時期に、狡知にたけた野心家が権力を握りでもしたら、彼の前にはあらゆる侵犯行為の途が開かれている。」¹²⁾

じっさいこの文章が書かれてから10余年が経過した1851年12月に、フランス国民の大半がルイ＝ナポレオン・ボナパルトの「侵犯行為」におとなしく服した。それを知ったうえでこれを読むと、トクヴィルの推論の正しさにうなずくしかない。われわれは「まるで予言だ」とつぶやいてから、「なぜ他の人には同じ推論ができなかったのだろう」と訝しく思うかもしれない。的中した予言は、同時期にあったそれ以外の考え方をすべて短慮の範疇に入れてしまうものだから。けれども後世の人間が同じ落とし穴にはまらないためには、当時トクヴィルと同じ推論をする人はむしろ例外で（二月革命を「予言」した1848年1月27日の演説は下院でさんざんの野次を浴びた）、政権内部では他の考え方が優勢だったことを忘れてはならないだろう。ギゾーのようなヨーロッパ文明について独自の史観をもつ知性の人が思

11) 『アメリカのデモクラシー第二巻』第2部14章。

12) 同上。

慮を欠いていたなどと、軽々しい口を利くべきではないだろう。ギゾーは独自の史観から割り出した政治のやり方を貫いただけだったのだろう。ただ彼の思考は硬直化していた。つまり従来の思考枠をはみ出す新しい事態がどんどん拡大して政権を脅かしているとき、旧態依然たる思考枠を再考するどころか、それをはみ出すほうが悪い、そちらが文明の敵であると決め付けるほどに、ギゾーの思考方法は柔軟性を欠いていたと言えるのではないか。少なくとも後世の目からそう判断されても仕方ない面はあるだろう。

ではギゾーはどのような政治手法で七月王政を運営しようとしていたのか、それをトクヴィルの観点から見てみたい。

③ ギゾーの政治手法

1843年1月、トクヴィルは *Le Siècle* 紙の求めに応じて、「フランスの内情についての手紙」と題する記事を6回にわたり連載するが、そのなかで政府が取ってきた反動的政策を列挙している¹³⁾。それを箇条書き風にまとめると1. 自由に集会をもつことを制限する。2. 集会制限を宗教的集まりにも適用して、信教の自由を圧迫する。3. ジャーナリズムの活動を制限する。4. 政府官僚は告発を免れる。5. 陪審員から反体制派を排除する。6. 個人の自由が脅かされる（簡単に逮捕される、長いあいだ拘留される、家宅捜査が頻繁になるなど）。7. 体制側に有利な選挙活動をするための操作をする。

こうして挙げてみると、これがシャルル10世の反動政治を打倒し、いまはブルジョワ中流階級の支持によって政権の地位にある者たちのやりかた方であるかと驚くしかない。しかし統治する側は、人民の活動にこのくらいの制限をもうけないと民主主義勢力の暴力から社会の安寧を守ることができないのだと釈明するだろう。そしてその釈明には説得性が乏しいと断言しにくいのは、同時代の証言たとえばパリ駐在オーストリア大使館に勤務していた *Rodolphe Apponyi* が残した日記を通読すると、パリの民衆がいかに頻繁に通りに出て騒いでいるかに目を見張らずにはいられないからである。王の命

13) *Lettres sur la situation intérieure de la France, in Œuvres tome I, Pléiade, pp. 1104-1106.*

が狙われたことも一度ならずあった。

ところが、である。トクヴィルによれば、政府は下流階級の人民が起こす騒動を利用し、それを新たな革命の前触れであるかのように言い立てることで中流階級の恐怖心を煽り、それによって偽りの安寧を維持しようと図っているにすぎない。制限選挙は社会下層からの声を吸い上げない制度だから、人民は騒動を起こすしか手が無い。つまりこの制度が普通選挙へと移行しないうちは騒動がおさまるべき理由はないのである。

すこし先走るけれど、トクヴィルはさらに根本的な問題をも提起していることを付言しておきたい。絶対王政が崩壊した以上、道はいずれ普通選挙制度による共和政へ通じているのであり、途中の立憲君主政は過渡的な形態にすぎないのだと言っているのだ。つまり立憲君主政は消滅を運命づけられている原理的に不可能な政治制度なのである。この深刻な問題をいずれゆっくりと掘り下げられるためにも、今はギゾーの政治にたいするトクヴィルの反応を追跡しよう。

たしかにギゾーは国の各地に散らばっている有能な人材を中央に集め、そこで決定されたことを政府の指令として国の隅々に素早く浸透させることをめざした。それは中央集権化の徹底以外のものではないだろう。トクヴィルは書いている。

「ぜひ伺いたいものだ、世界のいったいどこに行政の中央集権化に比較すべき統治機構があるものかを。ヨーロッパ最大の絶対君主のなかから探し出せるものならぜひ見せてほしい、ただの一人でいいから、掌中にこれだけ多数の役人を擁し、同じくらい持続的かつ直接的なやり方で、国事のみならず市民のほんのささいな利害関係にまで働きかける君主を。現代が生んだもつとも強力でもつとも独裁的な天才が、なんでも思いのままにできた時期に、自家用にこの強大な権力を作った。現政権はそれをまるごと引き継ぎ、さらに補強したのである。」¹⁴⁾

14) 同書、p. 1099。

言うまでもなく「もっとも強力でもっとも独裁的な天才」とはナポレオンをさす。皇帝によって存分に活用された中央集権機構がいまやさらに強力になり、国事から私事まで国民生活のあらゆる分野をその網の目に捕らえていると認識されている。すなわちギゾーの企図は実現し、七月王政政府は史上例をみない強力な行政機構を持つに至った。

これを統治者の視点からみれば、まことに結構な事態と言えるだろう。頭脳からの指令を身体に限なく迅速に伝達し、不穏分子のささいな動きをも捕捉して騒動の火種をいち早く消すことができるから。これでこそ革命の余波はおさまっていくだろう。すくなくともギゾーはそう考えていたはずである。

しかも政府は、いうならば自分の顧客であるブルジョワたちを籠絡するために、さらに強力な武器を手練っている。行政の中央集権化の弊害ならば、七月王政に限った話ではないけれど、トクヴィルがとくに憂慮し、非難するこの政府に特有のやり方がある。それは身分制社会が壊れ、みんなが平等になることで堰を切って広まった心の傾向を利用して、人々ことに中流階級に属する人々の歓心を買ひ、それによって体制シンパを増やす戦略である。

「人間が社会を構成して生きるようになって以来、現在のフランス人の王ほどに、自分の意を迎える人に分配すべきポスト、顕職、金を握っていた君主はいなかったと断言できる。ぜひ思い描いていただきたい、このような武器が、わが国におけるほどに、享樂には貪欲、境遇には不満、同類には嫉妬深いといった人々の多い国家でなにかできないことがあるかを！ わが政府が法律から得ているおかしな便益は話題に登るけれど、われわれの弱さと不善から得ているはるかに大きな便益のほうは忘れられているのだ。」¹⁵⁾

トクヴィルの意をもっとあからさまに言えば、七月王政は買収を統治手段に組み込んでいる。しかし注意したいのだが、彼の意図は政府要人のだれかれをあげつらって非難することにはない。こうした事態は、行政の中央集権化+代議制政府+平等という未曾有の結合から生じた危険だと指摘しているのである。

15) 同書、p. 1099。

④ 危機はどこにあるか

1844年11月にLe Commerce紙に掲載された「中央集権化と代議制度」は、短い記事ながら、この結合をフランスに特有の病根として抉りだしている。

行政の中央集権化ならばプロシャも同様？ そのとおり、しかしそこには代議制度がない。行政を取り仕切るのは王権である。代議制度ならばイギリスはフランスに先行する？ そのとおり、しかし行政を一手に握るのは中央権力でないから、政府顧客に分配すべきポストは限られている。

しかもフランス革命の斧は極端な貧富の差を生み出す根元に打ちおろされたから、あとには平等な権利をもつ大量の市民が発生した。そして平等な権利は、それまで抑えられていたさまざまな欲望を掻き立て、それを充足させる道へと人々を駆り立てたが、人々の多くは欲望を充足するための元手を欠いていた。広がる欲望に追いつく手段がない。トクヴィルがアメリカで観察したように、民主主義社会に生きる人々の浮き沈みは激しい。今日わが妻がまとうドレスとイヤリングは、明日はだれの妻を飾ることになるやら。いまやそういう社会に生きる人々の目の前に政府が差し出すその手のひらに、「どうぞ、あなた次第ですよ」とばかりに公務員ポストがおいてあったら？ しかも政府の宰領する公務員ポストは数限りなくある。政府にしてみれば、制限選挙制度下で投票権をもつ顧客が離反せずに支持してくれるならば、パリの下流民の騒乱がたとえ頻繁であってもこれを国民義勇兵（ブルジョワが治安維持のために組織する）が抑えるかぎり、政権は揺るがない。じっさいギゾーもルイ・フィリップも見かけの平穩を恃んでいた。

ところがその平穩の正体に目を凝らしてみよ、と警鐘を乱打するのがトクヴィルである。

「もし事態がこのまま進むにまかせたら、制度上の不善は人間の不善によって穏やかに拡大してゆき、いずれわれわれは過去にいかなる人民も経験したことのないレベルの精神的悲慘に行き着くであろう。（…）そうなればわれわれはひとつの同じ政体のなかに、異なる体制がそれぞれに抱える最悪のものを、すなわち絶対王政のもつ束縛と停滞、代議体制のもつ権力の腐敗と不公平、そのすべてを併せ持つてしまっているだろう。

われわれはいったいなにを待っているのか？ 現在の麻痺状態に沈んだまま、この偉大な国家を下僕の集団に変えてしまいたいとでも？ そこでは良心の売り買いはみんなが手を染める合法的な生業になり果てていなければならないとでも？ よく考えてみようではないか。われわれの父祖はわれわれのためにたくさんのことをやってくれた。昔からの桎梏をすべて打ち砕き、アンシャン・レジームの不平等、悪徳、貧困からわれわれを引き離してくれた。しかしすべてをやってくれたのではない。われわれにはひとつの大問題の解決が残されたのだ。どのような用心をすれば、どのような保障によって、どのような規則に則れば、フランスのような民主的社会のなかに、歴史上はじめて、巨大な中央集権と真摯な代議システムを組み合わせることに成功するのか。これこそが恐るべき謎であり、いまその謎を解く鍵を探さなければならないのだ。」¹⁶⁾

トクヴィルの警鐘を聞き分ける耳には、社会表層の平穏は、けっして統治者が誤解しているように人民の頭のなかで革命の文字が退色しつつあるからではなく、人々の精神が「麻痺状態」に落ち込んでいる証であることがわかるだろう。しかし「麻痺状態」とは？ 過去に例をみない「精神的悲惨」とはどのような状態を指しているのか？

この同じ状態をギゾーは肯定的に、トクヴィルは消極的に解釈しているわけだが、二人の正反対の解釈を導き出しているのは、スパンを長くとればヨーロッパ文明総体にたいする、また比較的短くとれば民主主義にたいするふたりの観点のちがいである。

6. トクヴィル vs ギゾー

「麻痺状態」という訳語をあててみたが、トクヴィルが使用したのは *la léthargie* という語で、手元の仏辞書を開くと、「そこでは生命機能が一時的に停止している深くて長い眠りを特徴とする病的な状態」と説明してある。医学用語で昏睡状態を指す。トクヴィルはフランス国民の生命機能が深くて

16) *La Centralisation administrative et le système représentatif*, in *Œuvres tome I*, Pléiade, pp. 1117-1119.

長い眠りの状態に陥っていると指摘しているわけであるが、彼はその原因を、七月王政主導者の誤解に基づく民主主義観とそこから導き出された政治手法にこそあると考え、早くから論難を浴びせてきた。たとえば民主主義社会の本当の危うさは、ギゾーたちが確信しているような下流階級の暴力的な突き上げにはないと匂わせるかのように、次のように述べている。

「打ち明けたところ、民主的な社会にとっては、欲望の厚かましきより、そのほどほどさ加減のほうがもっと恐ろしい。もっとも危惧すべきだと思うのは、私的な生活を絶え間なくみたす小事にかまけるうちに、野心はその翼を折りこじんまりしたものになってしまうことである。人間の情熱は沈静化し、そして同時に卑小になる結果、日ごとに総体としての社会は静かになり、そして品格を失っていく。

したがってわたしの考えでは、新しい社会の指導者がもし市民たちをあまりにも単調で穏やかな幸福のなかに眠り込ませようと望むとしたら、それは間違いであり、ときおりは困難で危険な事業を市民に与えることで、野心を鼓舞し、その翼を存分に広げることができる舞台を作ってやるほうが適切なのである。」¹⁷⁾

この文章中にある「市民たちをあまりにも単調で穏やかな幸福のなかに眠り込ませようと望む」という一節は、あきらかにルイ・フィリップ政府の政治手法を思い浮かべながら書かれている。それがわかると、この文章から数年さかのぼる 1833 年の手紙のなかで使われていた「卒中性麻痺状態」*torpeur apoplectique* という語がおのずと思い出される。革命から二年半が経過し、とりあえずの平穏が戻ってきた時点で、すでに七月王政の基調にたいするトクヴィルの認識の仕方は定まったようだ。

「今あるのは、社会を揺さぶるかもしれないすべての考え方、たとえそれが正しかろうが間違っていようが、品格があろうが下卑ていようが、とにかくすべての考え方にたいする無頓着である。自国政府を他の既成事実と同様であると見做す合意ができていらい。だれもがいよいよ個人的な利害に

17) 『アメリカのデモクラシー第二巻』第3部19章。

かまけている。このような兆候を目にして喜んでいられるのは、権力を自分自身のために欲しがる連中だけだ。祖国を強く、栄光あるものにするために欲するのではなくてね。すこしでも未来が読めるなら、こんな対価で買い取った平穩をあてにできるわけではないのに。これは健康で雄雄しい休息とはちがう。これは一種の卒中性麻痺状態で、もしこれが長く続くようなら、われわれは間違いなくとんだ不幸に導かれるよ。』¹⁸⁾

ここでトクヴィルはギゾーをはじめとする政権中枢部がとにもかくにも下流市民の騒乱を抑え、躍起になって回復した秩序を「一種の卒中性麻痺状態」と決めつけ、権力が自己目的化していると断罪している。それが1833年1月のこと。それから「眠り込ま」された市民を匂わす文章が1830年代後半に書かれ、さらに数年ののちには、「眠り込ま」された市民たちが「麻痺・昏睡状態」に落ち込んでいるのを、トクヴィルは目の当たりにしているわけである。ついにはこのままずるずると「人間の情熱は沈静化し、そして同時に卑小にな」り果てるのではないかとの恐れが彼に付きまとして離れない。前出の「精神的悲惨」とは、まさにこの状態をさす。

このように並べてみると、トクヴィルがいかに七月王政の18年間というもの、一貫してその批判者であったかよくわかる。もちろん現政権を弾劾するものは他にも多い。制限選挙制度からはじき出されている下流階級労働者はもちろんのこと、代議士仲間限定してみても体制批判者はすくなくない。たとえばラマルチーヌ。『冥想詩集』の成功によって華々しくパリ社交界に登場したこの詩人は、いまや民主主義勢力を率いるリーダーになっている。けれどもトクヴィルが詩人政治家を見る目には不信が宿る。『フランス二月革命の日々』の題名で訳出された回想録 *Souvenirs* では、「利己主義的な野心家が群れなす世界でも、彼の精神ほど公共のためを思うことなく、場当たりをねらうだけに意を凝らしている精神に出会ったことがない」¹⁹⁾とまで酷評しているのだ。

18) 『書簡選集』、p. 284。

19) *Souvenirs*, in *Œuvres* tome 3, p. 818, Pléiade.

トクヴィルは時代のなかで、ほとんど孤立しているといつてよい。家族の反対を押し切つてルイ・フィリップに宣誓し祖国のために尽力しようとしたのであったが、彼が全身全霊を打ち込んで救いたかったものは、王の政府がめざすものと懸け離れていることが、年を重ねるごとに明らかになっていく。富と安楽の追求にあくせくする中流階級のみを基盤とする政権に高邁な精神を求めるのは、木によって魚を求める類だったのであろうか。国民の情熱の萎えを代価にして得られる平穩とは精神の「麻痺状態」と別ものではない。ところがトクヴィルのうちには、なにかが狂おしく渦を巻いていて、それが彼を駆つて偉大な情熱、精神の高邁を求めさせるのだ。民主主義の冷静で鋭利な観察家と評価されがちなトクヴィルであるが、彼は手放しの民主主義礼賛者ではない。世界が民主主義に変わるのには神の意思であるから、と書き付ける彼のペン先はけっして軽やかに滑つてはいなかっただろう。むしろ彼の表情には翳りがあると感じる。その翳りのわけを問うても、彼のなかには民主主義からおおきくはみ出すなにかがあるから、としか答えようがないように思う。じっさい自分を突き動かすそのなにかを言い当てようと、彼自身もがいている様子があきらかな妻への手紙の一節。

「ぼく自身の心の絶え間ないざわめきをだれに描けるというのか、それにわざわざ耳傾けてくれるだれかがいるというのか、きみ以外に？ だれにわかるというのか、ぼくの魂を満たす卑小さを、にもかかわらずある度外れで、巨大な意欲を？ それはぼくの魂を偉大さのほうに絶え間なく引き摺っていくのだよ。ぼくは幾千回望んだか知れない、神がぼくに人間の本性の悲惨と限界を見ることをお許しにならなかつたらよかつたのに、あるいは高みからそれを見させてくれたらよかつたのにと。いやいや、ぼくは人間のひとりだ、一番ありふれた一番凡庸な人間のひとりだ、それなのにぼくには人間を超えるなにか、人間の彼方にあるなにかが垣間見えるのだ。ぼくは、なにごとにつけ、理想を追い求めているのに、ぼくが近づくほどに理想は後退していく。ぼくは存在しないある絶対、ある完璧を切望している。ぼくに必要なのは全、しからずんば無だ。だから来る日も来る日もぼくは欲望の巨大さと手段の乏

しさのあいだで、もがいているのだよ。」²⁰⁾

7. トクヴィルから福沢へ

フランスでトクヴィルが孤立していたのと相似形を描くように、福沢は明治時代の日本で孤立していた。そして妻への手紙に見るようなトクヴィルの肺腑をえぐる狂おしさに似たものを『文明論の概略』に漲る悲壮感からも感じるのだが、どうだろうか。

こうしてギゾーの批判者としてのトクヴィルの姿を点描してくると、やはり福沢が明治日本で孤軍奮闘する姿に重ねてみたい気持ちが強まる。

(続く)

20) 『書簡選集』、p. 400。